

鹿児島県三島村黒島におけるブユ対策

野田伸一

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

Control of Blackfly in Kuro Island, Mishima Village, Kagoshima Prefecture

NODA Shinichi

Research Center for the Pacific Islands, Kagoshima University

要旨：三島村の黒島ではアシマダラブユによる刺咬の被害がひどく、その対策としてブユ幼虫が生息する水系への殺虫剤の定期的な投入が青年会に作業を委託するという方法で行われている。報告者はブユ駆除作業の指導とその評価をボランティアとして続けてきている。2010年5月に鹿児島大学水産学部の南星丸による調査地が悪天候のため出航後に三島村の黒島に変更されたことは、ブユ対策の評価を抜き打で行う機会となった。現地調査では、井之口川の横で飛来するアシマダラブユ成虫を採集することができ、また大里港のすぐ上の宮向川ではアシマダラブユの幼虫と蛹を採集することができた。担当者からの聞き取りにより、学校の先生の定期異動の影響で4月以降は殺虫剤の投入が行われていないことが判明し、この時期のブユ対策の検討が必要であることが判明した。

Abstract : In Kuro Island, Mishima Village, Kagoshima Prefecture, biting by the blackfly (*Simulium japonicum*) is severe. Therefore, insecticide is applied regularly to rivers a control the measure. To evaluate the effect of insecticide, a survey of blackfly was carried out on Kuro Island. The adults were collected near the Inokuchi River, and larvae and pupae were also collected in the Miyakou River. It turned out by the interview that the insecticide had not been applied to rivers since April.

三島村の黒島、十島村の口之島と中之島ではアシマダラブユ刺咬による被害がひどく、その対策としてブユ幼虫が生息する水系への殺虫剤の定期的な投入が行われている。殺虫剤の効果は水系がスムーズに流れていればかなりの距離で効果が期待できるが、水系に落葉などのゴミがあったり、水系が伏流となると殺虫剤は吸着され効果が急速に低下する。また、水系の途中に大きなプールがある場合には殺虫剤の濃度が急速に低下してしまう。従って、殺虫剤の散布では水系の状況を十分に把握した上での殺虫剤の投入が必要である。また、水系の状況は季節によって異なり、梅雨時期には水量が増加し、また水系が上流に伸びることによってブユの発生数が多くなる。このようなことから、殺虫剤の投入においては決められた場所で一定量の殺虫剤を投入するだけでは不十分で、作業者が水系の状況を判断して適宜調整することが重要になってくる。黒島水系は急峻で、また樹木や竹などにより簡単に水系を遡れない場所も多く、殺虫剤の投入作業は簡単なものではない。

黒島では三島村が特定の作業者と契約するのではなく、学校の先生も含めた青年会に作業を委託している。この方法は地域の問題を自ら解決するという観点から優れた方法である。ブユ駆除作業の指導と駆除効果の評価を佐藤英毅（日本環境衛生センター）と報告者がボランティアとして続けてきている。2009年7月には殺虫剤投入作業にあたる青年会のメンバー 18名を対象に水系の流水量の測定や殺虫剤投入方法さらに作業での留意点などについて指導を行った。その折に、水系の実地調査（作業効果の評価）を行い、ブユ対策の成果がかなりあがっていることを確認した。

指導と評価のために黒島に行けるのは1年に1回であり、事前に役場関係者や現地関係者と打ち合わせを行った後に黒島に行くようになっている。従って、我々が訪問する時期以外にはどのような状況であるかは推測するしかなかった。今回、鹿児島大学水産学部の南星丸による調査地が、悪天候のために三島村の黒島に変更されたことは、ブユ対策の評価を抜き打で行う機会となった。船が入港した大里周辺でブユの発生状況を見ることができた。ブユに関しては住民の方々から被害がひどく農作業時にたくさん刺咬されるという苦情があった。また、同行した調査メンバーから夕方にブユがたくさん飛来したとの報告があった。実際に、調査メンバーや乗組員も数名がブユの刺咬を受けた。実地調査では、井之口川の横で飛来するアシマダラブユ成虫を採集することができ、また大里港のすぐ上の宮向川ではアシマダラブユの幼虫と蛹を採集することができた。

ブユ発生水系への定期的な殺虫剤の投入が続けられているにもかかわらず、多数のブユが発生していることは意外であった。夕方に南星丸の見学に学校の先生方がおいでになり、いろいろ話を聞く機会があった。ブユに関しては、学校の先生の定期異動の影響で、4月以降は殺虫剤の投入ができていないとのことであった。現在のブユ被害の発生は単純に殺虫剤を発生水系に投入していないことによることが判明した。

ブユの被害が増加するのは梅雨の時期である。気温の上昇でブユの発生サイクルが短くなることと降水量の増加に伴って水系が上流に延び発生源が広がることが考えられる。従って、夏の時期の被害を減らすためには4・5月のブユ対策の実施は非常に重要である。学校の先生の4月の定期異動は毎年のことであり、この時期のブユ対策をどのように実施するのかの検討が必要になった。



写真1. アシマダラブユの発生水系

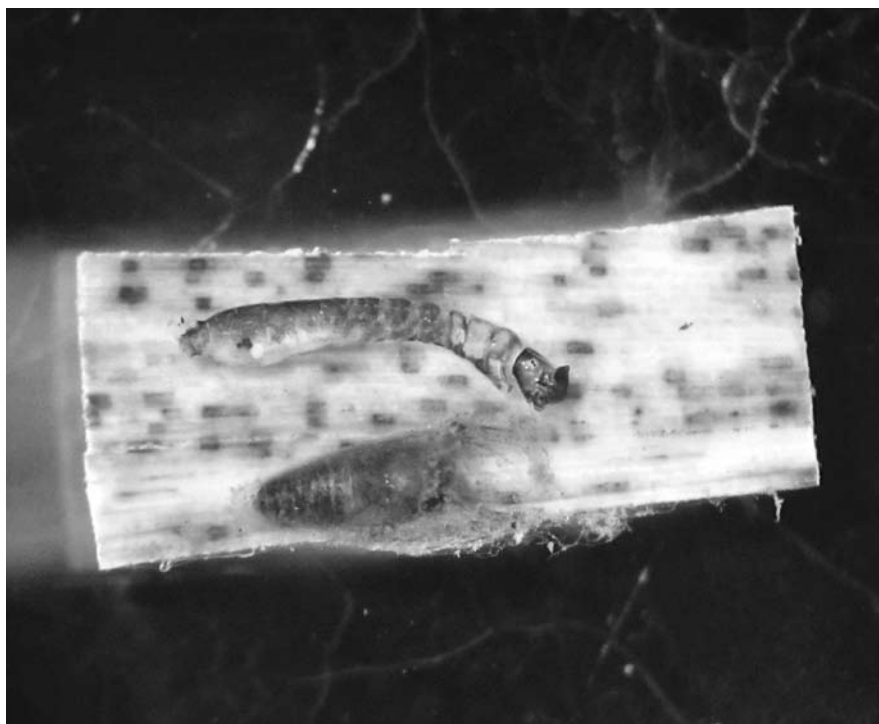


写真2. アシマダラブユの幼虫（写真上）と蛹（写真下）